

ベルリン文学コロキウム

——現代文学の交差点——

松 永 美 穂

ベルリン文学コロキウム (Literarisches Colloquium Berlin. 以下、LCB と略記) はベルリンの西の外れ、ヴァンゼー湖畔にある。日本では80年代に大岡信ら日独の詩人たちが参加した「ヴァンゼー連詩」の舞台として記憶されていることが多いかもしれない。設立は1963年で、ベルリン工科大学でドイツ文学を講じていたヴァルター・ヘレラーのイニシアティブによって、ザントヴェルダー5番地にあった建物が文化・芸術関係のイベントのために供されることになり、LCBの発足となった。

築120年の瀟洒なヴィラは、所有者の推移を見るだけで現代ドイツ史の一端を垣間見る思いがする。当初、裕福な工場経営者の持ち家であり、その後銀行家の所有となった。1925年には家主の親戚だったカール・ツックマイヤーがここにひと夏滞在して作品を執筆している。1934年、家の所有権はユダヤ人のエンジニアに移ったが、その一家は翌年には亡命を余儀なくされ、その後「アーリア化」されたこの建物は海軍が実験所として使うことになった。戦後は連合軍がカジノ兼ホテルとして使用し、1953年に元の所有者にいったん返還された後、1960年からはベルリン州の管理下におかれていた。

ヴァルター・ヘレラーはドイツ文学者であり、詩人・作家としても知られる。2003年、奇しくもLCB設立40周年記念日当日に80歳で死去した彼を追悼する新聞記事では、文学の世界における仲介者・助言者としての貢献が特に強調され、その功績が称えられていた。「47年グループ」の招集者として多くの作品の誕生に立会ったハンス・ヴェルナー・リヒターと並んで、ヴァルター・ヘレラーとLCBが文学の創作現場で果たした重要な役割は、忘れてはならないだろう。ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』に対する最初の書評を書いた批評家でもあるヘレラーは、「47年グループ」とも密接な関わりを持ち、1962年および1965年の「47年グループ」の会合は彼のお膳立てでザントヴェルダー5番地の建物で開かれている。「47年グループ」は70年代前半に消滅したが、LCBは文学のサポート機関として、作家たちに出会いや実験の場、奨学金やワークショップ、文学賞などを提供するとともに、出版社・エージェント・批評家・翻訳者・一般の読者などを結ぶ場として機能し続け、成果を挙げている。

LCBの設立20周年に先駆けて1982年に出版された „Autoren im Haus — Zwanzig Jahre Literarisches Colloquium Berlin“ (Galerie WANNSEE Verlag) を見ると、文学コロキウムが当初は文学者だけでなく、映画制作者たちにも積極的に活動の場を提供していたことがわかる。LCB内にスタジオも設けられ、実際にここで映画が撮影・編集された。また、演劇のワークショップや海外の演劇グループの招待公演、音楽についてのワークショップ

(LCB 発足直前の 1962 年にベルリン工科大学と自由ベルリン放送が共同で行った「技術時代の音楽」という催しには、参加者としてジョン・ケージやリゲティ、シュトックハウゼン、吉田秀和らの名前が見える)、写真展(特にレナーテ・フォン・マンゴルトが LCB と協力して撮影した作家たちの写真は、文学史の重要な記録となった。彼女は現在も撮影を続けており、LCB の写真アーカイブを管理している)など、さまざまなジャンルにわたる活動には、文学を紙の上の活字にはとどまらず、文学のあり方そのものを拡大しようとする勢いのあったことが、残されているプログラムからも見て取れる。

ここで初期の LCB のプログラムを大別すると、

1) 作家の朗読会・講演会・討論会

ギュンター・グラス、ペーター・リュームコルフ、ペーター・ヴァイス、エルンスト・ブロッホ、ウーヴェ・ヨーンゾン、ハインリヒ・ベル、インゲボルク・バッハマン、パウル・ツェランなど、名前を挙げだせばきりがない。ドイツ語圏の重要な作家で LCB に来なかった人を探す方が難しいだろう。(„Autoren im Haus“ の索引には、実に 800 名以上の作家の名が挙がっている。)ドイツ語圏の作家だけでなく、外国からも積極的に作家を招いた。ドス・パソスやジョン・スタインベック、イタロ・カルヴィーノやスーザン・ソントグ、エリアス・カネッティ。チェコ、ギリシャ、スウェーデン、オランダ、アメリカなど、特定の国から作家たちを招いてドイツの作家や批評家たちと対話させる形のコロキウムも頻繁に開かれていた。

2) 若い作家の育成、指導

ここから巣立っていった作家にハンス・クリストフ・ブーフやペーター・ビクセル、フーベルト・フィヒテやニコラス・ボルンなどがある。LCB を舞台にした合作小説『ゲストハウス』が 15 人の若い作家によって書かれ、1965 年に出版されている。最近ではユーディット・ヘルマンが、LCB の主催するワークショップのもっとも成功した卒業生といえるだろう。ベストセラーになった彼女の最初の短編集『夏の家、その後』には、LCB への謝辞が記されている。LCB 初期のころ開かれた戯曲執筆のワークショップでは、ロンドン出身のトム・ストッパードが彼の出世作となる『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』の最初の場면을 LCB で書いたというエピソードもある。

3) 映画制作、テレビ放送用の番組制作

テレビ番組の大部分は、LCB が主催したイベントのライブ放送やドキュメントのようだ。1964 年から 5 年にかけての「小さな舞台の上のモダン演劇」シリーズや、「映画における変化」(パリ、プラハ、ワルシャワ、ニューヨーク、ローマなどの映画人たちの試みの紹介。ローマの部にはパゾリーニが出演している)シリーズ、演劇ワークショップ(グラスやホフホフト、デュレンマットやフリッシュなどの作品が取り上げられている)、そのほか「都市の文学プロフィール」など。これらはいずれも 60 年代から 71 年ごろまでのシリーズで、

その後は80年から81年にかけての「作家の肖像」シリーズ、さらに女性監督たちによる82年のオムニバス映画「青天の霹靂」などがある。「47年グループ」や「ベルリン工科大学」などのドキュメント映画には、ヴォルフガング・ラムスボット（1934年生まれ、73年からベルリン芸術大学教授）が監督として参加しているものが多い。

4) 出版活動

文芸誌「アクツェンテ」の発行人でもあったヘレラーは、1963年に雑誌「技術時代の言語」を立ち上げた。この雑誌はその後、現在に至るまで年4冊ずつ発行を続けているが、現在の文学・文化研究のテーマを先取りするような斬新な特集が多い。そのほか、LCB発行で「技術時代の文学」年鑑や「作家カレンダー」、「技術時代の言語」の特集を単行本にまとめたものや作家たちのアンソロジーなどが出版されている。また、個々の作家の論文や詩集、エッセイ集などもLCB編集で年何冊かずつ発行されていた。（そのなかには安部公房『棒になった男』のドイツ語訳なども含まれていて興味深い。）

5) 写真展などの開催

ベルリン工科大学との共催でレナーテ・フォン・マンゴルトの写真展が開かれたほか、72年には「言葉からなる世界」展が芸術アカデミーで開かれた。81年の「文学と造園術」という催しでは、公園や城の文学ガイドツアーも行っている。

6) 文学賞授与

デーブリンを自らの文学の師と仰ぐギュンター・グラスの基金によって79年に「デーブリン賞」が創設され、以後ほぼ隔年で賞が授与されてきている。（79年と80年、82年と83年は2年連続で受賞者が出ている。）対象は長編の未発表散文。また、80年と82年には「デーブリン学会」もLCBで開かれている。

設立20周年の記念本がカタログのような厚さで過去20年間の記録や写真を満載していたのに比べ、設立40周年を記念して発行された『文学のただなかにある家』はテキストもすっきりとまとめられ、本というよりは小冊子のような趣きだ。ここではLCBの歴史があらためて簡単に振り返られ、現在のプログラムが紹介されている。設立当時との大きな違いは、映画が重点項目から外れたこと、代わりに国内外の翻訳者へのサポートに大きなエネルギーが注がれるようになったこと、また、文学賞の数がずっと増えたことだろう。さまざまなジャンルの創作者を一堂に集めていた初期のころのような実験的なおもしろさは少なくなったかもしれない。むしろエスタブリッシュされた文学機関として、ゲーティンステットウートやDAAD、外務省や国営第一放送、ライプツィヒの書籍見本市などと協力関係を結んでスマートな活動を展開している。朗読会、討論会、シンポジウムなどは相変わらず活発に開かれている。若い作家のワークショップも行われており、散文・戯曲などジャンルを限定したうえで募集を行っているようだ。文学賞はデーブリン賞のほかに、

1989年に創設されたベルリン文学賞（初回はフォルカー・ブラウンが受賞）、1992年からのヨハネス・ボプロフスキー・メダル、1999年から設けられた詩の新人賞、さらにドイツ語から英語への翻訳者に対するヘレン&クルト・ヴォルフ翻訳賞（賞金1万ドル、LCBでの3か月滞在つき）、オランダ語・フラマン語からドイツ語への翻訳に対するエルゼ・オッテン賞などにLCBがかかわっている。内外の作家をLCBに招く滞在型奨学金も出されており、LCBの毎月のプログラムには、当月の「滞在作家」が紹介されている。（たとえば2004年6月には、ハンガリー、アルバニア、スロヴァキア、アイスランドからの作家たちがLCBに滞在していた。）

筆者自身は2002年夏に開かれた第3回翻訳者アカデミーに参加して、LCBの活動の恩恵に浴することになった。翻訳者アカデミーは毎年8月末に開かれ、ドイツ語から外国語への翻訳者、そのなかでも特に文学作品の翻訳に携わっている翻訳者が15人程度招かれて1週間のプログラムに参加することになっている。このプログラムの担当者はLCB館長代理でもあるユルゲン・ヤーコプ・ベッカーだが、普段外国で生活している翻訳者に最新のドイツ文学の情報を提供するとともに、朗読会に参加したり、作家や出版社と直接コンタクトを取る機会を与え、最近の出版ビジネスの仕組みを紹介するため文学エージェントと接触させたり、新聞社の書評担当者との懇談の機会も設けてくれている。翻訳者同士の情報交換にも役立ち、LCBを通じて得たネットワークはいまでも仕事の役に立っている。翻訳者アカデミーは始まった当初は欧米の翻訳者のみに対象を絞っていたが、2002年以降は日本人の翻訳者が毎年2名ずつ参加しており、2004年には中国からも参加者があった。HPを見て直接申し込むこともできるが、東京のゲーティンストゥートに推薦してもらうという方法もある。参加条件は既訳書が1冊以上あることだが、若手の場合は未出版でも企画があれば受け入れてもらえる場合もあるので、翻訳に関心のある人にはぜひお勧めしたい。

2002年の夏だけでなく、2003年の夏にもLCBに半月ほど滞在させてもらった。湖を見下ろせるヴィンターガルテンが朝食室で、こじんまりしたこの場所では自然に同席者たちと言葉を交わすことになる。何気なく席に着いたら隣に新作朗読のためミュンヘンからやってきた作家のエルンスト・アウグスティンがいてびっくりしたこともあった。ゲストルームは2階と3階に合わせて10室ほどあり、1階にはキッチンとホール、会議室、2階にはLCB職員たちのオフィス、3階にはゲスト用のコンピュータールームがある。ベルリンの中心部からは離れているが、執筆や翻訳などの仕事に集中するにはかえって適しているかもしれない。LCBを出て斜面を湖畔へと下ると遊覧船の発着場に着く。LCBのすぐ隣の敷地、ザントヴェルダー3番地の建物はベルリンの日本人学校として使われている。

ベルリンには文学館(Literaturhaus)と文学工房(LiteraturWERKstatt)もあるが、Literaturhausは1986年、LiteraturWERKstattは1991年設立でLCBに比べると日が浅い。場所のうえではLiteraturhausはクーダムに接するファザーネン通りにおいてベルリンの中心部に位置しており、LiteraturWERKstattの方はパンコーで10年間活動した後プレントラウアーベルクのKulturbrauereiのなかに移り、ベルリンの東の文化的中心の一部と

なっている。この二者と西の外れに位置する LCB とで、地理的なバランスは非常にうまくとれているといえるかもしれない。LCB の館長は 86 年にヘレラーからウルリヒ・ヤネツキーに交代した。ヘレラーのときのような派手さはないかもしれないが、採算の取れる形で堅実かつ安定した活動が行われている。「技術時代の言語」はトーマス・ガイガーが編集長になり、いまでも年 2 回発行されている。ラジオではドイツ放送が毎月 1 回「スタジオ LCB」——作家たちが未発表の原稿を朗読し、批評家と討論する番組——を放送している。またラジオ・ブレーメンも年に 4 回、LCB との協力のもと、「文学クラブ」(Literarischer Club) という、最新の文学についての討論番組を放送している。

2005 年は「日本におけるドイツ年」ということで、ゲーティンスティットゥートとのタイアップで LCB も東京での文学関係イベントを準備している。LCB の活動が日本に紹介されるいい機会となるかもしれない。(LCB のホームページアドレスは、www.lcb.de)